

令和元年6月24日現在

機関番号：34325

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26380722

研究課題名(和文)家事労働における感情と意識の構築過程 - 高度経済成長期を生き抜いた女性の証言分析

研究課題名(英文) The Process of Constructing Emotions and Consciousness in Domestic Labor: Women's Experiences During High Economic Growth Period

研究代表者

斧出 節子 (ONODE, Setsuko)

京都華頂大学・現代家政学部現代家政学科・教授

研究者番号：80269745

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：性別分業化が進んだとされる高度経済成長期に焦点を当て、統計、新聞・雑誌、インタビューで得られたデータを用い、女性たちが行っていた実際の家事の内容とそれに対する意識、固定的な性別役割分業体制が形成されたプロセス、そしてその促進要因について分析した。
その結果、産業構造の転換とともに、子どもに対する愛情表現としての「手作り」や「教育」に関わる家事が重要であるという家事意識が強化され、それはメディア等を通して女性たちに浸透し、実践されていたことが明らかになった。また、家事の内容や女性の意識は、地域や社会階層によって異なっていたことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代社会においても「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業意識は根強く、家事・育児・介護などの再生産労働の多くを女性が担っている。
産業構造の変化により主婦化が進んだ高度経済成長期の家事を分析し、現在にもみられる、子どもを重視する家事の実践や家事意識が形成された要因やプロセスを明らかにしたことは、これからの社会において性別分業によらない再生産労働のあり方を考える上で意義がある。

研究成果の概要(英文)：Focusing on the period of high economic growth, when there was a deepening of the gender division of labor, we investigated the actual condition of housework and women's consciousness of it, and the process of and factors facilitating the rigidification of gender role division.

The results show that together with the transformation of the industrial structure, there was a strengthening of the consciousness of the importance of "housework" as an expression of love for children and in connection to education. The spread of such ideas through the media infiltrated women's consciousness and facilitated their actual practice. In addition, it was found that the content of housework and women's consciousness differed depending on region and social class.

研究分野：家族社会学

キーワード：主婦化 高度経済成長期 性別役割分業 創造的家事 愛情イデオロギー 女性労働者 教育 社会階層

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「男は仕事、女は家庭」という、女性が一手に家事・育児・介護を引き受けるという性別役割分業を定着させ促進したのは近代家族の大衆化であり、その時期は高度経済成長期といわれている。この時期は、農村から都市への人口の流出、自営業層の減少、雇用労働者層の増大などがみられた時期でもある。

戦後の産業構造転換期に女性が主婦化し、性別役割分業体制が定着した要因については、日本における資本制や家父長制、人口学的要因、公共・家内領域の分離、終身雇用・年功賃金・企業福祉を柱とする日本的経営、家事に対する愛情規範など、これまで広い分野で莫大な数の研究が蓄積されてきた。しかしながら、その当時の女性たちがどのような生活のもと、実際にどのような主婦の姿であったかについてこれまで十分な検討が行われてきたとは言い難い。そこで、高度経済成長期の子婦化の過程を、実際に行われていた家事とそれを行っていた女性の意識から分析し、女性の主婦化を促進し支えた要因を考察することが必要であると考えに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、性別分業体制が広く形成されていったとされる高度経済成長期に焦点を当て、女性たちがどのような家事をどのような意識で行っていたのかを分析し、固定的な性別役割分業体制が形成されたプロセスと、形成を促進した要因を明らかにすることである。

性別役割分業に関して、その分業化が最も進んだのは高度経済成長期であることが指摘されている。本研究は、高度経済成長期に、女性が家事労働の担い手となっていく過程を、その当時の当事者の感情・意識を中心に分析していく。

3. 研究の方法

その方法として、第一に、統計データや文献を用いた分析を行う。資料には、女性労働に関する統計データ、新聞・雑誌などを用い、都市における主婦化の進展、家事の内容、家事に対する女性の意識などを考察する。

次に、都市家族において生産労働と再生産労働を実際に担ってきた人びとへのインタビューを実施し、日本社会における性別役割分業化の過程を、感情・意識の側面から明らかにしていく。

インタビュー調査は、都市部で育った人、農村から都市部に移動してきた人の両方が混在しているという観点から、古くから都市を形成してきた関西のX市を中心に行った。対象者の選定は、高度経済成長期に結婚し育児を経験した人という基準で、団体や個人を通して紹介してもらいインタビュー調査協力の依頼をした。その結果、女性28名(1930年代生まれ15名、1940年代生まれ12名、1950年代生まれ1名)、男性11名(1930年代生まれ9名、1940年代生まれ2名)の計39名にインタビューが行われた。女性対象者のなかには、非婚者4ケース、既婚子どもなし1ケースが含まれていた。インタビュー内容を記録しデータとして用いることを対象者から許可を得、対象者の自宅や職場、団体事務所、研究代表者の大学などでインタビューを実施した。実施時期は、2015年8月から2017年12月である。

インタビューは半構造化面接で、回想法でたずね、一人約1時間半から2時間程度行った。主な調査項目は、対象者が子ども時代に行われていた家事・育児の内容とその担い手、対象者が育児期のころの家庭での家事・育児の内容とその担い手、家事・育児に対する意識、結婚前後の職歴と仕事の内容、仕事に対する意識などについてである。

4. 研究成果

(1) 統計データから読み取る西陣地区の女性労働と主婦化

高度成長期前後(昭和34年~昭和59年に焦点を当てた)における西陣地区において、近代家族の形成による主婦化がどのように展開したのかを考察した。一般的には高度成長期において近代家族が形成され、性別分業に基づく女性の専業主婦化が展開したといわれている。しかし西陣の地においてはその展開は鈍いものであった。それは女性が貴重な労働力として期待されていたからである。そこでさまざまな工程からなる西陣織業の中で、女性労働者が多くを占め、西陣の女性労働の特質を示す織手(ウィーパー)に焦点を当て、西陣地区の過去の各種調査データや文献から女性労働者の推移を跡付けてみた。

その結果以下のことが明らかになった。高度成長期に西陣地区では女性ウィーパーが多く雇用されていた。特に、自動機織である力織機はほぼ女性が占めていた。そして西陣織の従業員数は昭和50年から激減していくが、女性ウィーパーは景気の調節弁であったことがわかった。つまり、女性労働者は、景気の変動とともに男性労働者と比べて賃金が安い調整弁であるが故に解雇されやすい存在であった。したがって、高度成長期において西陣では女性労働力が重視されたことから近代家族の形成、女性の主婦化は遅れたといえるだろう。西陣では、1970年代半ばの繊維不況による産業の空洞化により、女性の労働力が必要とされなくなった。西陣の専業主婦化は、高度成長期終焉とともに、女性が労働者として機業から離れることでもたらされた。

(2) 新聞記事にみる家事に対する意識

高度経済成長期に、家電製品の普及や家事の社会化により、それまでには行われなかった新しい家事が作りあげられたとされる。そこで、この時期の家事の具体的な内容と家事の特色を明らかにするために、朝日新聞に1957年12月から1959年12月まで連載された「今月の家事」という記事を分析した。これらの記事では、家事を行う上で、「ムダを省いた合理化」、「科学的知識に基づく衛生、健康への志向」、「創意工夫により家事や家庭生活を楽しむものとする」、「趣味を楽しんだり社会的な活動を行ったりするなど、余暇時間を有意義に使う」、「家族員と話し合い、それぞれの家族にあった家事を行う」ことが重要だと述べていた。さらに、1964年の『朝日新聞』には、「好きな家事はより創造的にのぼす。(中略)きれいな家事は、機械などを使った合理化でできるだけ少なくしてゆく - それが今後の家事の正しい方向ではないだろうか」という記事もみられる。1950年代の新聞記事で説かれた家事は、1960年代には、「正しい」家事として規範意識が強化されていた。

以上のように、1950年代後半の新聞記事では、それぞれの家庭独自の家事を、家族構成員と話し合っ楽しく行うことを重視している。このことにより、家族構成員の結びつきが強固な楽しい家庭になる一方で、家内領域の閉鎖性が増す。また、家族のなかでも、特に子どもの健康管理、教育を重視し、子どもを中心に家族の行事を計画することが大切だとされた。これらの家事により、子ども中心の家庭が作りあげられたと考えられる。1950年代に新聞などのメディアで説かれ、作りだされた家事は、家族の閉鎖性を強め、子ども中心の楽しい家庭を生み出すものであった。そして、女性がこれらの家事を担うという性別分業体制を前提としている。こうした家事内容が、1960年代に「家事規範」として受け継がれ、目指すべき家事として推し進められていった。

(3) 雑誌記事にみる家事

高度経済成長期に、製造業の発達にともなって家電製品が普及し、家事の社会化も進展した。そのことにより、主婦の行う家事は、炊事や裁縫、洗濯などの「作業的な家事」から家庭を管理する家事へと変化したとされる。そこで、この時期に家事は具体的にどのように変化したのか、また、「管理的な家事」とはどのような家事だったのかを、「寝具」にかかわる家事の変化をたどることにより分析した。資料には、当時発行された雑誌や新聞の記事を用いた。

1950年代から60年代にかけて、合成繊維産業の発展により合織わたの布団とマットレスが普及するなどして、寝具類は「寝具革命」と呼ばれるほどに変化した。そのことにより寝具に関わる家事も大きく変化し、布団わたと夜具地を購入して布団を作り、定期的に打ち直しを行い、日々布団を日に干すという「作業的な家事」が軽減された。その一方で、商品としての布団に関する知識を得、良いものを選んで使用し管理するという「管理的な家事」が出現した。さらに、寝具選びでは家族の健康に気をつけ、デザインを重視するなどして楽しい生活を営むという点が重視された。

寝具の例にみられるように、具体的な家事内容は産業の発展によって生活を取り巻く製品が変化したことによりもたらされた。そして、「管理的な家事」が目標としたことは、家族の健康を維持増進し、楽しく幸福な家庭をつくることにあったといえる。

(4) 新聞の投書記事から読み取る農村女性の家事と意識

農村女性を対象に、1950年代から60年代の生活状況および家事や家族に対する意識、特に、現代的家事や家族観の特色と考えられる「家事を楽しむ」「家族との精神的なつながりを大切に」という意識がどのように形成されたのかについて考察した。資料には、『朝日新聞』の投書欄「ひととき」と『毎日新聞』の投書欄「女の気持ち」に掲載された記事をまとめた図書である『「ひととき」30年』(3冊)と『「女の気持ち」三十年』(4冊)を用いた。連載開始から1969年までの514編の投稿のなかから、農業に従事する女性とその家族、農村に住む助産婦や教員などが農村女性の生活について意見を述べている記事60編を分析し、以下のことが明らかになった。

1950年代の農村の女性たちは農作業と家事の過重な二重労働を担っており、家事をするのは女であることが当然視され、男がすることはなかった。女性たちは農作業に追われ、家事は炊事や洗濯、子どもの世話、繕い物など最低限をこなす状況であったが、栄養のある食事を作り、子どもの勉強をみたいというような意識をもつ女性もあった。1950年代半ば以降、生活改善事業などの成果もあり、おいしい料理を作ること、その料理を子どもが喜ぶことなどに「楽しさ」を感じるようになっていた。さらに、農村と都市の生活の違いが顕在化し、農村での重労働や自由になる時間やお金がない生活に対して不満をもつようになった。1960年代には現金収入がなければ快適な生活を維持できないという時代になり、出稼ぎや兼業が進み、そのことにより、家族がばらばらに生活することや、母親が日中家をあけることに対して精神的に満たされない思いを抱くようになっていた。

以上のように、1950年代半ばから60年代の社会状況の変容が農村女性の家事や家族に対する意識に変化をもたらし、快適な生活環境で行う家事を「楽しむ」意識や家族間の精神的なつながりを大切にすることが意識が形成されていったのである。

(5) 家事としての衣服作りと女性の意識

1950年代から既製服産業が発展し、衣服の調達、家庭内での製作や注文服によるものから

既製服の購入へと変化した。しかし、1960年頃に既製服の時代になり技術習得の必要性が薄れたにもかかわらず、1960年代半ばまで洋裁を習っていた女性が多かったことが明らかにされている。

そこで、1960年頃に洋裁を習っていた女性の家庭内での衣服作りの状況を検討し、女性が行っていた家事が高度経済成長期にどのように変化し、そのことに女性がどのような意識をもっていたのかを分析した。資料には、洋裁を習っていたインタビュー対象者12名のデータを用いた。

分析の結果、洋裁を習っていたのは学校卒業から結婚までの数年間という女性が多かった。1950年代に習っていた人には、その頃には既製品が十分出回っていなかったため洋裁の技術が必要だったという意識がみられた。1960年代に習っていた人には、洋裁を習うのは花嫁修業という意識が多くみられた。また、1950年頃に洋裁を習った人は、1950年代前半までは既製服の供給が十分ではなかったため結婚前から自分と家族の衣服を縫っていた。また、1960年前後から1960年代に子育てしていた世代は主に子どもの衣服を楽しんで作っていた。

さらに、当時の新聞記事（『朝日新聞』「水曜洋裁店」1959年～1970年）を分析した。その結果、このような衣服づくりでは、子どもを中心に家族の衣服を作ることに主眼がおかれ、手間ひまかけた「手作り」であること、「個性」を表現し、作品に「暖かさ」という愛情を込めること、「楽しむ」ことなどが重視されるようになったことが明らかになった。

1960年代の既製服産業の発達によって、家庭での衣服作りは必須の家事ではなくなった。既製服化は、多大な労力を要する裁縫を家事として行わなくてもよい道を開いたが、衣服作りという家事は「家族への愛情」「楽しさ」などを表す家事として存続した。この時期に、家事は「生活を営むために必要な労働」から家族への「愛情を表現する」労働へと変化したといえる。

(6) 女性の就業状況と仕事に対する意識

高度経済成長期頃に出産、子育てをしながら仕事をしていた女性たちが、どのような状況で仕事をし、仕事に対してどのような意識をもっていたのかを分析した。分析するインタビュー対象者は、結婚後に結婚前とほぼ同じ仕事を継続して行っていた女性9名である。9名を業態で分類すると、服飾関係、織物関係の事業経営者として働いていた女性が3名、自宅で地場産業に関わる職人仕事をしていた女性が2名、看護師、教員、事務員として働いていた雇用者が4名である。

分析の結果、以下のことが明らかになった。まず、仕事に対しては、「楽しい」「好き」「面白い」などの意識がみられ、自分の世界をもつことができる、社会的に評価される、自立できる、夫と対等になれることなどに価値を見出していた。女性たちが得た収入は、自分と夫、子ども、自分の親兄弟、夫の親兄弟の生活を支えていた。

夫との関係では、夫が積極的に妻の仕事を後押しした場合でも、妻は夫に対して気をつけて生活し、自由ではなかったと感じていた。夫が妻の仕事に理解がない場合は、仕事を続けるために夫と粘り強く話し合うなどして意志を通していた。

子育ての担い手は、従業上の地位や経済力によって異なっていた。事業者は、子育てを自分の親兄弟やお手伝いさんに任せ、自分ではほとんどしていない。雇用者の子育てには、家族・親族、近所の人たちの強力な援助が必要だった。自宅で仕事をしている職人は、自分で家事・育児をしていた。

以上のことから、仕事に対して楽しみや生活を支えるなど多様な意義を見出していたこと、子どもの世話を他の人に委ねることに寛容な女性が多くみられたこと、夫は家事・育児をほとんどしておらず、そのことに女性は不満を抱いていなかったことなどが明らかになった。

(7) 家事・育児の実態と主婦の規範意識・感情

高度経済成長期に農村から都市へと流出する人口が増え、そのなかで家事・育児の実態や意識が変化していったとされている。農村での「主婦」は、まずは生産労働者として期待され、家事や子育ては他に代替する人がいればその人たちが役割を担うという実態がこれまでの研究で明らかにされており、産業化や都市化に伴いどのように家事・育児の実態や規範・感情の変化が生じたのかを明らかにすることを目的に、インタビュー調査の分析を行った。対象者は、高度経済成長期に結婚、育児の経験をもつ13名の子供である。

その結果、第1に、家事・育児の担い手の実態とそれにかかわる役割規範の内面化は社会階層によって異なっていた。富裕層の商家（2ケース）では、住み込みの雇用者が行う部分が大きく、また経済力のある主婦（3ケース）は、家事や子育てを親族に委ねていた。彼女たちには「他人に任すことができる」家事・育児役割は求められず、また、彼女たち自身もそのような家事・育児に対する義務や責任の意識は弱かった。その一方で、夫がサラリーマンの場合、主婦の就労の有無にかかわらず、ほとんどの家事・育児を主婦が担当しており、主婦が家事・育児をするものという規範意識も強く内面化されていた。多くは農家出身で都市的生活に転換することで、家事・育児役割を専ら担う「主婦」になっていた。

第2に、社会階層に関係なく、多くのケースで重要な家事・育児として語られたのは、子どもに関連する実践が多かった。主婦たちが力を入れて行っていた家事や育児の内容は、富裕層では時間のやりくりをしながらの子どもの弁当作り、本の読み聞かせ、子どもの衣服作り、学校行事への参加で、他方、専業主婦は「楽しみ」や「趣味」として、子どもの弁当作り、子ど

もの衣服作り、おやつなどの「手作り」、学校行事への参加に時間を費やしていた。こうした家事が行われたのは、「愛情イデオロギー」と深く関連している。子どもへの愛情表現としての家事は、母親としての主婦自身の情緒的満足をもたらすもので、階層に関係なく子どもに対して、「手作り」や「教育」という領域で実践されていた。

(8) まとめと考察

高度経済成長期に多くの女性たちが力を入れて行っていたのは、子どもに関連する家事であった。子どもの弁当作りや衣服作り、おやつなどの「手作り」、学校行事への参加、本の読み聞かせなどであり、子どもに対する愛情表現が「手作り」や「教育」という領域で実践されていた。また、こうした家事を行うことは「楽しい」という意識を伴っていた。高度経済成長期に、家事は「生活を営むために必須の労働」から家族への「愛情を表現する」「楽しい」ものへと転換したといえる。

「生活を営むために必須の労働」としての家事が軽減されたのは、産業の発達による家事の社会化や家電製品の普及などによる。さらに、産業構造の転換は、時間に余裕のある、多くの雇用者の妻を生み出した。こうした女性に向けて、家事の具体的内容をあげながら、子どもに関する家事の重要性や家事の楽しさなどを説く記事が、新聞や雑誌に繰り返し掲載された。家事・育児を担う女性が、余裕ができた時間を使って「手作り」を楽しみ、子どもの「教育」に力を入れるようになったのは、メディア等を通して「愛情イデオロギー」や「家事規範」が内面化され、「手作り」や「教育」をしなければならない家事とみなすようになったからである。しかし、家事の転換は一律に生じたのではなく、地域や社会階層によって異なっていた。雇用者が多い都市の方が農村より早く、農家出身者は都市的生活を営むことにより、「愛情を表現する」家事を行うようになった。都市のなかでも、自営業者の妻は長く生産労働に従事する傾向にあった。裕福な商家の妻や、経済階層が高い女性たちは、家事・育児全般に対する責任意識が弱い場合であっても、「愛情イデオロギー」は内面化されており、子どもに関する家事は自ら行っていた。

以上のように、「手作り」や「教育」に関わる家事が、高度経済成長期の産業構造の転換によって広く女性たちに実践されるようになった。そして、このような家事は、現在においてもなお重視され、行われている。グローバル化が進み、経済状況や産業構造も大きく変化しつつある現代において、家族のあり方や家事の担い手も変化してきている。性別分業によらない再生産労働のあり方は、今後社会全体で考えなければならない課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

- 1) 斧出節子(2019)「高度経済成長期における家事・育児の実態と規範意識・感情 - 高度経済成長期に生きた女性たちへのインタビュー調査から - 」世界人権問題研究センター『研究紀要』(24),
- 2) 馬場まみ(2018)「高度経済成長期における女性の就労状況と仕事に対する意識 - インタビュー調査の分析から - 」『京都華頂大学・華頂短期大学研究紀要』(63), 37-48
- 3) 馬場まみ(2018)「1960年代における家事としての洋裁の変化とその特色」『京都華頂大学現代家政学研究』(7), 3-9
- 4) 馬場まみ(2016)「高度経済成長期における農村女性の生活状況と家事・家族に対する意識」『京都華頂大学・華頂短期大学研究紀要』(61), 41-51
- 5) 馬場まみ(2016)「高度経済成長期における家事労働の変容と女性の役割 - 寝具に関わる家事を通して - 」『京都華頂大学現代家政学研究』(5), 13-20
- 6) 馬場まみ(2015)「高度経済成長期における家事労働と家事規範の形成 - 1960年前後の新聞記事の分析から - 」『京都華頂大学現代家政学研究』(4), 9-16
- 7) 新矢昌昭(2015)「高度成長期における西陣地区の女性労働について」『京都華頂大学現代家政学研究』(4), 17-26

〔学会発表〕(計2件)

- 1) 斧出節子・馬場まみ・新矢昌昭(2018)「インタビュー調査にみる高度経済成長期を過ごした女性たちの家事・育児意識」日本家政学会家族関係セミナー
- 2) 新矢昌昭、斧出節子、馬場まみ(2018)「高度成長期の子育て・教育—インタビュー調査を通して—」関西教育学会第70回大会, 関西福祉科学大学

〔図書〕(計1件)

- 1) 斧出節子(共著)「ジェンダーと親密性」『現代家族を読み解く12章』丸善出版

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：馬場まみ
ローマ字氏名：(BAMBA,Mami)
所属研究機関名：京都華頂大学
部局名：現代家政学部現代家政学科
職名：教授
研究者番号（8桁）：80218677

研究分担者氏名：新矢昌昭
ローマ字氏名：(SHINYA,Masaaki)
所属研究機関名：華頂短期大学
部局名：歴史学科
職名：教授
研究者番号（8桁）：70625699

研究分担者氏名：湯浅俊郎
ローマ字氏名：(YUASA,Toshiro)
所属研究機関名：京都華頂大学
部局名：現代家政学部現代家政学科
職名：准教授
研究者番号（8桁）：20632350

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：